

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝詩賦に見る「ふね」（上）：先秦から東晋まで
Author(s)	佐伯, 雅宣
Citation	中國中世文學研究 , 73 : 1 - 22
Issue Date	2020-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049262">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049262</a>
Right	
Relation	



# 六朝詩賦に見る「ふね」(上) — 先秦から東晋まで

佐伯雅宣

はじめに

六朝時代の文学の特徴の一つとして山水詩の隆盛が挙げられ、それにもない水辺の風景が詩によく描かれるようになるが、本稿ではその中で「ふね」に注目した。詩中に「ふね」が描かれる場合、そこには誰が乗っているのか。一般に旅の途上にある作者や去りゆく友人、あるいは遊覧を楽しむ主君等が考えられる。つまりそれは作者自身か、作者と何らかの関わりがある人物が乗る「ふね」であると言える。しかし例えば梁詩には次のような例が見られる<sup>1)</sup>。

何遜「日夕望江山贈魚司馬詩」(梁詩卷八)

洛納何悠悠 洛納 何ぞ悠悠たる  
起望登西樓 起ちて望まんと西樓に登る  
的的帆向浦 的的として 帆浦に向ひ  
團團月映洲 團團として 月洲に映ず  
誰能一羽化 誰か能く一たび羽化し  
輕舉逐飛浮 輕舉して逐ひて飛浮せん

何遜「敬酬王明府詩」(梁詩卷九)

星稀初可見 星稀にして初めて見る可く  
月出未成光 月出でて未だ光を成さず  
澄江照遠火 澄江 遠火照らし  
夕霞隱連檣 夕霞 連檣隱る  
梁簡文帝「奉和登北顧樓詩」(梁詩卷二十一)  
霧崖開早日 霧崖 早日に開き  
晴天歇晚虹 晴天 晚虹を歇く  
去帆入雲裏 去帆 雲裏に入り  
遙星出海中 遙星 海中より出づ

いずれも水辺の風景描写がなされているが、その中にある「ふね」は、作者自身が乗るものでも、その友人等が乗るものでもない。作者とは無関係の事物であり、対となる語に月や星が用いられる例もあるように、いわば作者が目にした風景の一部として描かれているのである。このように人工物である「ふね」が、山水風景の中にそ

れこそ自然に描かれるようになるのはいつ頃からののか、という疑問が本研究の発端である。

また「帆」、「去帆」(去る帆)、「連檣」(連なる檣<sup>ほぼしら</sup>)といった語で「ふね」をあらわしている点も興味深い。これは詩人が目にしたものをそのまま詠じているように思われるが、ある物の一部をもってその本体を表すという意味においては、いわゆる換喩表現と見ることもできる。こういった「ふね」をあらわす表現にも着目しつつ、古代から六朝に至るまでの詩賦を題材とし、「ふね」の描かれ方について考察することとした。

## 一 先秦

まずは『詩経』から見てみたい。

邶風・柏舟

汎汎柏舟 汎たる彼の柏舟  
亦汎其流 亦た汎として其れ流る  
耿耿不寐 耿耿として寐ねられず  
如有隱憂 隱憂有るが如し  
〈毛伝〉興也。汎汎流貌。柏木所以宜以爲舟也。亦汎汎其流、不以濟渡也。(興なり。汎汎は流るる貌。柏木は宜しく以て舟を爲るべき所以なり。亦た汎汎として其れ流れ、以て濟渡せざるなり。)

〈鄭箋〉舟載渡物者、今不用而與羣小人並列亦猶是也。(舟は興者、喻仁人之不見用而與羣小人並列亦猶是也。)

渡物を載する者、今用ひられずして衆物と汎汎然として俱に水中に流る。興とは、仁人の用ひられずして群小の人と並び列することも亦た猶ほ是のごときを喩ふるなり。)

この詩には、「ふね」が水に浮かび漂う様子が詠われているが、鄭箋よれば、それは才能がありながら用いられない人物に喩えたものだという。

邶風・柏舟

汎汎柏舟 汎たる彼の柏舟  
在彼中河 彼の中河に在り  
髣彼兩髦 髣たる彼の兩髦は  
實維我儀 實に維れ我が儀  
〈鄭箋〉舟在河中、猶婦人之在夫家是其常處。(舟の河中に在るは、猶ほ婦人の夫家に在りて是れ其の常處なるがごとし。)

この詩に詠われる「ふね」は、夫を亡くした妻がなお夫の家にとどまることを喩えたものと解されている。

衛風・竹竿

淇水滳滳 淇水 滳滳たり  
檜楫松舟 檜楫 松舟  
駕言出遊 駕して言に出で遊び

以寫我憂 以て我が憂を写かん  
〔毛傳〕舟楫相配、得水而行。男女相配得禮而備。（舟楫相配し、水を得て行く。男女相配し、礼を得て備わる。）

小雅・菁菁者莪

汎汎楊舟 汎汎たる楊舟

載沈載浮 載ち沈み載ち浮ぶ

既見君子 既に君子を見れば

我心則休 我が心 則ち休す

〔鄭箋〕舟者沈物亦載浮物亦載。喻人君用士、文亦用武亦用、於人之材無所廢。（舟は沈物も亦た載せ浮物も亦た載す。人君の士を用ふるに、文も亦た用ひ武も亦た用ひ、人の材に於いて廢する所無きを喻ふ。）

小雅・采芣

汎汎楊舟 汎汎たる楊舟

紉纒維之 紉纒 之を維ぐ

樂只君子 樂只の君子は

天子葵之 天子 之を葵る

〔毛傳〕明王能維持諸侯也。（明王 能く諸侯を維持するなり。）

〔鄭箋〕楊木之舟浮於水上、汎汎然東西無所定。舟人以紉繫其綏以制行之、猶諸侯之治民御之以礼法。（楊木の舟は水上に浮び、汎汎然として東西して定まる所無し。舟人 紉を以て其の綏を繫ぎ以て之を制行すること、猶

大東）などがあり、さらに次のような詩もある。

大雅・大明

造舟爲梁 舟を造して梁と爲す

不顯其光 顯かならざらんや其の光

〔毛傳〕天子造舟、諸侯維舟、大夫方舟、士特舟。（天子は造舟、諸侯は維舟、大夫は方舟、士は特舟。）

「造舟」とは、舟をいくつも並べて浮橋を造ることである。この毛伝と同様の文が『爾雅』积水にもあり、その郭璞注に「比船爲橋」（船を比べて橋と爲す）という。身分によって乗る「ふね」が異なることを述べており、「造舟」とは天子の「ふね」であることが分かる。

こういった例もあるが、総じて『詩経』の「ふね」は、毛伝や鄭箋など古注の解釈を見るかぎり、大半は何らかの比喩である。これはその多くが一、二句めに描かれることから分かるように、あくまで比興としての「ふね」であり、実際に誰かが乗って移動するものとして描かれることはほとんどない。

続いて『楚辞』についてはどうか。こちらは『詩経』とは異なり、実際に人が「ふね」に乗る描写がいくつも見られる。

九歌・湘君

ほ諸侯の民を治め之を御するに礼法を以てするがごとし。）

これらはいずれも毛伝や鄭箋によれば、「ふね」の水に浮かぶ様子などが、何らかの比興（比喩）であると解釈している。すなわち人が乗るものとしての「ふね」ではない。

邶風・二子乘舟

二子乘舟 二子 舟に乗る

汎汎其景 汎汎たる其の景

願言思子 願ひて言に子を思ふ

中心養養 中心養養たり

この詩は『左伝』に基づく話があり、衛の宣公の子伋・寿の異母兄弟が、「ふね」に乗って伋の生母の故国である斉に行くのを詠ったものである<sup>2)</sup>。『詩経』において、実際に人が「ふね」に乗ってどこかへ行くことが詠われているのはこの詩のみである。

また『詩経』に詠われる「ふね」は、「柏舟」「松舟」「楊舟」など、「舟の材質」＋「舟」という語で描かれる例が目立つ<sup>3)</sup>。一方、「船」字の例は見られない。

その他「ふね」にまつわる語としては、先の「衛風・竹竿」の「檜楫」（檜の楫）や、ここには挙げていないが、船頭を表す「舟子」（邶風・匏有苦葉）、「舟人」（小雅・

君不行兮夷猶 君 行かずして夷猶す

蹇誰留兮中洲 蹇 誰か中洲に留まる

美要眇兮宜修 美しく要眇として宜修に

沛吾乘兮桂舟 沛として 吾 桂舟に乗る

〔王逸注〕沛、行貌、舟、船也。吾、屈原自謂也。言己雖在湖澤之中、猶乘桂木之船、沛然而行、常香淨也。

（沛は、行く貌、舟は、船なり。吾は、屈原自ら謂ふなり。言ふところは己は湖沢の中に在ると雖も、猶ほ桂木の船に乗るがごとく、沛然として行き、常に香淨なり。）

〔呂向注〕我復乘桂舟以迎神。舟用桂者、取香潔之異。（復た桂舟に乗り以て神を迎ふ。舟に桂を用ふるは、香潔の異を取る。）

ここに屈原自ら乗るものとして「桂舟」の語が見られる。「桂」字を冠するのは『詩経』の「楊」「柏」等とは異なり、王逸や五臣・呂向の注が指摘するように、やはり清らかさ、高潔さを象徴するものであろう。さらに「九歌・湘君」にはこの後に以下のような句もある。

薜荔柏兮蕙綯 薜荔の柏 蕙の綯

搴櫂兮蘭旌 搴の櫂 蘭の旌

〔王逸注〕蓀、香草也。櫂、船小楫也。屈原言己居家則

以薜荔樽飾四壁、蕙草縛屋、乘船則以蓀爲楫、蘭爲旌旗、動以香潔自修飾也。（蓀は、香草なり。櫂は、船

の小楫なり。屈原言ふ己家に居れば則ち薜荔を以て四壁を樽飾し、蕙草もて屋を縛し、船に乗れば則ち蓀を以て楫櫂と為し、蘭もて旌旗と為し、動もすれば香潔を以て自ら修飾するなり。」

桂櫂兮蘭枻

桂の櫂 蘭の枻

斲冰兮積雪

氷を斲り雪を積む

〔王逸注〕櫂、楫也。枻、船旁板也。一作棹。〔櫂は、楫なり。枻は、船の旁板なり。一に棹に作る。〕

〔張銑注〕桂蘭、取其香也。〔桂蘭は、其の香を取るなり。〕

このように『楚辞』には、楫あるいは櫂を表す語、また船ばた（あるいは楫）をいう「枻」などの語も見られるが、多く香木名を冠しており、やはり自らの高潔さを喻えていると言える。

この他にも「ふね」に乗って川を行く描写には以下のような例が見られる。

九章・哀郢

將運舟而下浮兮

將に舟を運らして下に浮ばんとし

上洞庭而下江

洞庭に上らんとして江に下る

九章・惜往日

乘汜淝以下流兮

汜淝に乗りて以て流を下り

無舟楫而自備

舟楫無くして自ら備ふ

的な違いというより、その土地柄が大きく関わっている。これらの作は洞庭湖や湘水、沅水を舞台としており、詩人自身が「ふね」に乗って流浪しつつ、己の憂愁を詠うさまが描かれているのである。

## 二 漢

つづいて漢代であるが、まずは漢人の作とされる『楚辞』から見てみたい。

東方朔「七諫・沈江」

將方舟而下流兮

將に舟を方べて流を下らんとす

冀幸君之發矇

君の矇を發くを冀幸ふ

〔王逸注〕大夫方舟、士特舟。……方、一作舫。

ここには「方舟」（舟を方ぶ）の語が用いられている。王逸の「大夫方舟、士特舟」という注は、先述した『詩經』大雅・大明の毛伝や『爾雅』积水に同じものがある。『爾雅』の郭璞注に「併兩船」（兩船を併す）と言ひ、二つの「ふね」を並べたものとされるが、この語は、六朝以降しばしば用いられるようになる。

劉向「九歎・離世」

櫂舟杭以横瀾兮

舟杭に櫂して以て横に瀾り

滄湘流而南極

湘流を滄りて南に極る

〔王逸注〕杭、一作航。

〔王逸注〕乘舟汎船而涉渡也。編竹木曰泝。楚人曰枻、秦人曰撥也。〔舟に乗り船を汎べて涉渡するなり。竹木を編むを泝と曰ふ。楚人枻と曰ひ、秦人撥と曰ふなり。〕

九章・涉江

乘舳船余上沅兮

舳船に乗りて余沅に上り

齊吳榜以擊汰

吳榜を斉しくして以て汰を撃つ

船容與而不進兮

船容與として進まず

淹回水而凝滯

回水に淹まりて凝滯す

〔王逸注〕舳船、船有櫂者。吳榜、船櫂也。〔舳船は、船に櫂有る者なり。吳榜は、船の櫂なり。〕

「九章・哀郢」では、「ふね」を動かすさまを「運舟」（舟を運らす）という。「九章・惜往日」にある「泝」とは、竹や木を編んで作った筏のようなもので、「ふね」の一種である<sup>4</sup>。

そして「九章・涉江」は、「舳船」（窓のある船）という熟語ではあるが、初めて「船」字が詩賦に使われた例と言つて良いだろう。ただし『楚辞』を通してこの一例のみで、やはり多いのは「舟」である。楫や櫂などを表す語（楫、櫂、棹、吳榜等）が種々あるのに比べると対照的である。

このように『楚辞』には『詩經』に比べ、「ふね」に乗って川を行く様子が多く描かれるが、これはやはり時代

劉向「九歎・遠逝」

橫舟航而滄湘兮

舟航を横へて湘を滄れば

耳聊啾而儻恍

耳聊啾として儻恍たり

劉向「九歎」には、「舟航（杭）」の語が見られる。「舟」も「航」も「ふね」を表す語であり、それを二つ重ねて作られた新たな語と言えるが、これも六朝詩にいくつかが継承されている。

そしてここに見られる「ふね」は、いずれも東方朔や劉向自身が乗るものであり、それによって川に浮かび漂いつつ、憂愁や憤懣を訴えているのである。

つづいて『文選』所収の漢賦として、前漢の司馬相如、後漢の班固、張衡の賦を見てみる。

司馬相如「子虛賦」（『文選』卷七）

怠而後發、游於清池。浮文鶴、揚旌棹。張翠帷、建羽蓋。

罔璫瑁、鈎紫貝。縱金鼓、吹鳴籟。榜人歌、聲流喝。

怠みて後に發し、清池に遊ぶ。文鶴を浮べ、旌棹を揚ぐ。翠帷を張り、羽蓋を建つ。璫瑁を罔し、紫貝を鈎す。金鼓を縱ち、鳴籟を吹く。榜人歌ひ、声流喝。

〔張揖注〕鶴、水鳥也。畫其象於船首也。〔鶴は、水鳥なり。其の象を船首に画くなり。〕

司馬相如「上林賦」（『文選』卷八）

下棠梨、息宜春、西馳宣曲、濯鷁牛首。  
棠梨に下り、宜春に息ひ、西のかた宣曲に馳せ、鷁を牛首に濯ふ。

漢賦に見られる「ふね」の特徴として、諸侯や天子の舟遊びの様子を描く点が挙げられる。さらに注目すべきは「文鷁」「鷁」の語である。「子虚賦」張揖注にあるように、「鷁」とは水鳥の名であり、船首にその形を象ることから「ふね」を表す語として、詩賦にしばしば用いられる。

#### 班固「西都賦」(『文選』卷一)

東郊則有通溝大漕、潰渭洞河。汎舟山東、控引淮湖、與海通波。……於是後宮乘輶輅登龍舟、張鳳蓋建華旗、祛黼帷鏡清流、靡微風澹淡浮。櫂女謳、鼓吹震。聲激越、警厲天。

東郊には則ち通溝大漕有り、渭に潰り河に洞る。舟を山東に汎べ、淮湖を控引し、海と波を通ず。……是に於て後宮は輶輅に乗り、龍舟に登り、鳳蓋を張り華旗を建て、黼帷を祛げ清流に鏡され、微風に靡き澹淡として浮ぶ。櫂女謳ひ、鼓吹震ひ、声激越として、警として天に厲る。

この班固「西都賦」には、「汎舟」の語が初めて見られるが、これは運河に「舟を汎べ」て山東まで行くことが

いづれも作者自身が乗るものではないという点である。王や天子が遊覧を楽しむために乗っており、彼らを称えるという側面もあるが、賦の目的である諷諫という視점에立てば、豪奢な「ふね」は批判の対象でもある。

#### 張衡「南都賦」(『文選』卷四)

爾乃撫輕舟兮浮清池、亂北渚兮揭南涯。汰澣澣兮船容裔、陽侯澆兮掩鳧鷖。

爾して乃ち輕舟に撫りて清池に浮び、北渚を乱りて南涯に掲る。汰澣澣して船容裔し、陽侯澆りて鳧鷖を掩ふ。

もうひとつ張衡「南都賦」を挙げるが、ここには「輕舟」の語が見られる。この場面は、上巳節に水辺で「輕舟」に乗って狩猟をする人々の様子が描かれており、すなわち天子や諸侯ではない普通の人々が乗るものとしての「輕舟」ということになる。そして作者とは直接関わりのない人が乗るものとしてはこれが初見である。

この他、漢人の辞賦として漢武帝「秋風辞」がある。

#### 漢武帝「秋風辞」(『文選』卷四十五)

泛樓舡兮濟汾河 樓舡を泛べて汾河を濟り  
橫中流兮揚素波 中流に横はりて素波を揚ぐ  
簫鼓鳴兮發棹歌 簫鼓 鳴りて 棹歌を發し  
歡樂極兮哀情多 歡樂 極まりて 哀情 多し

できると述べるもので、移動の手段としての「ふね」である。その後は天子が長安の昆明池に「ふね」を浮かべて楽しむ様子が詠われる。このような天子の舟遊びは、張衡「西京賦」にも同様の描写がある。

#### 張衡「西京賦」(『文選』卷二)

於是命舟牧爲水嬉、浮鷁首翳雲芝。垂翟葆建羽旗、齊棹女、縱櫂歌。

是に於て舟牧に命じて水嬉を爲し、鷁首を浮べ雲芝を翳し、翟葆を垂れて羽旗を建つ。棹女を齊へ、櫂歌を縱つ。

これら班固「西都賦」、張衡「西京賦」に描かれるのは、上に旗を立て、天蓋や美しい帳を施した「鷁首」「龍舟」「」など非常に豪華な「ふね」である。なおこういつた描写は長安を詠った「西都賦」「西京賦」にしか見られず、「東都賦」「東京賦」にはない。天子の遊覧とは、絢爛豪華で贅沢なものであるがゆえに、質素を旨とする「東都賦」「東京賦」では描かれなかったのではないだろうか。またこれらの漢賦に共通して見られるのが歌(音楽)である。「榜人歌」(子虚賦)、「櫂女謳」(西都賦)、「齊棹女、縱櫂歌」(西京賦)など表現は異なるが、櫂などで「ふね」をあやつる者が歌をうたい、それにより舟遊びの楽しさが一層増す様子がうかがえる。

そしてこの漢賦の「ふね」がそれまでと異なるのは、

〈李善注〉應劭漢書注曰、作大舡、上施樓。故號曰樓舡。(應劭漢書注に曰く、大舡を作り、上に樓を施す。故に号して樓舡と曰ふと。)

これは武帝自身が川に「ふね」を浮かべて遊覧するさまを詠ったものであり、「樓舡」(舡は船の俗字)の語が用いられている。李善注によれば、上に樓閣を建てた「ふね」であるということだが、ここで「舟」ではなく「舡」(船)字を用いるのは、大型の「ふね」であるためであろうか。そして最後にはやはり「棹歌」によつて楽しみが最高潮へと達するのである。

また漢の古詩・古樂府には以下のような例がある。

#### 「鼓吹曲辞・上陵」(漢詩卷四)

桂樹爲君船 桂樹を君の船と爲し  
青絲爲君竿 青糸を君の竿と爲す  
木蘭爲君櫂 木蘭を君の櫂と爲し  
黃金錯其間 黄金 其の間に錯はる

#### 秦嘉「贈婦詩三首」其三(漢詩卷六)

河廣無舟梁 河広くして舟梁無く  
道近隔丘陵 道近きも丘陵を隔つ  
「樂府古辞・悲歌」(漢詩卷十)  
欲歸家無人 帰らんと欲するも家に人無く

欲渡河無船

渡らんと欲するも 河に船無し

「琴曲歌辞・将婦操」(漢詩卷十一)

狄之水兮風揚波 狄の水風波を揚ぐ  
船楫顛倒更相加 船楫顛倒して更に相ひ加ふ  
歸來歸來胡為斯 帰り来れ帰り来れ 胡ぞ斯を為さん

「上陵」は、桂樹を船、木蘭を櫂とすると詠っており、『楚辞』の流れをくむものと言える。秦嘉「贈婦詩」、「悲歌」は、川を渡る手段としての「ふね」が無いことを詠っており、それまでには見られない新たな表現ではある。しかし総じて漢賦に比べると、古詩・古楽府に詠われる「ふね」はきわめて少ない。ただし数少ないながら「船」字が目立つのは特徴的でもある。

### 三 魏

さて、魏に入ると「ふね」が描かれることはさらに増えてくる。魏代の詩と賦で用いられ方に傾向の違いは見られないため、ここではそれらを合わせて見てみたい。まず熟語として多いのは「輕舟」と「方舟」である。

曹植「贈王粲」(『文選』卷二十四)

中有孤鴛鴦 中に孤鴛鴦有り  
哀鳴求匹儔 哀鳴して匹儔を求む  
我願執此鳥 我此の鳥を執らんと願ふも

まずこれらは「輕舟」の用例である。曹植「贈王粲」では、手段・方法として「ふね」が無いことが詠われており、その意味では漢代から見られるものである。『文選』の「輕舟」で李善注が引かれているのは、この詩のみで『戦国策』を引く。これは燕策二にあるもので、蜀から「輕舟」に兵を乗せて長江を下れば、簡単に楚の都郢に行けることが述べられている。いわば移動・輸送の手段としての「ふね」であり、李善はそこまで意識してこれを引用したのである。

その他、曹植「洛神賦」では自ら「輕舟」に乗り、洛水の女神を求めている。曹植「節遊賦」、王粲「浮淮賦」、阮籍「詠懷詩」も、行旅や遊覧のために詩人自身が乗る「ふね」を「輕舟」と称している。この語の先例として張衡「南都賦」があるが、ここでは天子や王ではなく普通の人々が乗る「ふね」を指している。曹植らはそれを踏まえつつ、自分が乗るのは決して豪奢で大きな「ふね」ではないという謙遜の意味もあろう。

つづいて「方舟」の例である。

楊修「節遊賦」(『芸文類聚』卷二十八)

於是迴旋詳觀、目周意倦。御于方舟、載笑載言。仰泝涼風、俯濯纖腕。

是に於て迴り旋りて詳觀し、目は周く意は倦む。方舟を御して、載ち笑ひ載ち言ふ。仰ぎて涼風を泝へ、俯

惜哉無輕舟

惜しい哉 輕舟無し

〈李善注〉戦国策、蘇代曰、水浮輕舟。(戦国策に、蘇代曰く、水に輕舟を浮ぶと。)

曹植「洛神賦」(『文選』卷十九)

冀靈體之復形、御輕舟而上遡。浮長川而忘反、思緜緜而增慕。

靈体の復た形るるを冀ひ、輕舟を御して上遡る。長川に浮びて反るを忘れ、思ひ綿綿として慕を増す。

曹植「節遊賦」(『芸文類聚』卷二十八)

步北園而馳騫、庶翱翔以寫憂。望洪池之混漾、遂降集乎輕舟。

北園を歩みて馳騫し、翱翔して以て憂を写かんことを庶ふ。洪池の混漾たるを望み、遂に輕舟に降集す。

王粲「浮淮賦」(『初学記』卷六)

泛洪檣于中潮兮、飛輕舟乎濱濟。建衆檣以成林兮、譬無山之樹藝。

洪檣を中潮に泛べ、輕舟を浜濟に飛ばす。衆檣を建てて以て林を成し、無山の樹芸に譬ふ。

阮籍「詠懷詩八十二首」其七十六(魏詩卷十)

汎汎乘輕舟 汎汎として輕舟に乗り  
演漾靡所望 演漾するも望む所靡し

して纖腕を濯ぐ。

王粲「遊海賦」(『芸文類聚』卷八)

乘菌桂之方舟、浮大江而遙逝。翼驚風以長驅、集會稽而一睨。

蘭桂の方舟に乗り、大江に浮びて遙かに逝く。驚風を翼して以て長駆し、会稽に集まりて一睨す。

王粲「七哀詩二首」其二(『文選』卷二十三)

荆蠻非我鄉 荆蛮は我が郷に非ず  
何爲久滯淫 何為れぞ 久しく滯淫せん

方舟溯大江 方舟 大江を 溯り  
日暮愁我心 日暮れて我が心を愁へしむ

〈李善注〉爾雅曰、大夫方舟。郭璞曰、併兩舡也。(爾雅に曰く、大夫は方舟と。郭璞曰く、兩舡を併すなりと。)

王粲「從軍詩五首」其三(『文選』卷二十七)

從軍征遐路 軍に従ひて遐路を征き  
討彼東南夷 彼の東南の夷を討たんとす

方舟順廣川 方舟 広川に順ひ  
薄暮未安坻 薄暮 未だ坻に安んぜず

曹植「雜詩六首」其一(『文選』卷二十九)

之子在萬里 之子 万に在り  
江湖迴且深 江湖 迴かに且つ深し

方舟安可極 方舟安くんぞ極る可けんや  
離思故難任 離思故に任へ難し  
〈李善注〉爾雅曰、大夫方舟。郭璞曰、併兩船也。

曹植「雜詩六首」其五（『文選』卷二十九）

江介多悲風

江介悲風多く

淮泗馳急流

淮泗 馳せて急流す

願欲一輕濟 願はくは一たび軽く濟らんと欲するも  
惜哉無方舟 惜しい哉 方舟無し

「方舟」の語は、先の東方朔「七諫」にもあるが、魏以降急激にその数は増える。『文選』李善注は、先にも述べた『爾雅』积水を多く引く。そこには「天子造舟。諸侯は維舟。大夫方舟。士は特舟」とある。この「方舟」とは、二艘の舟を並べたもので、「舟を方ぶ」と訓ずることも多いが、『爾雅』に基づくのであれば、身分によって「ふね」が変わることを言うものであり、「方舟」（方べたる舟）という「ふね」の種類を指すものと考えるべきではないだろうか。実際に二艘並べたようなものであったかは定かではないが、王粲や曹植らが自ら乗る「ふね」を言う時には、当然のことながら天子の乗る「造舟」ではなく、諸侯の「維舟」でも士の「特舟」でもなく、「方舟」がふさわしいと考えていたのであろう。

なお曹植の雜詩の二例はともに手段としての「ふね」

〈李善注〉國語曰、秦汎舟于河。

王粲「從軍詩五首」其二（『文選』卷二十七）

我君順時發

我が君 時に順ひて發し

桓桓東南征

桓桓として東南に征す

汎舟蓋長川

舟を汎べて長川を蓋ひ

陳卒被隰垌

卒を陳べて隰垌を被ふ

〈李善注〉國語曰、秦汎舟于河。

いずれも『文選』に収められており、李善注ではすべて『國語』を引く。『國語』晋語三にあるもので、飢饉に苦しむ晋に、秦が食糧を輸送する時の描写である。曹植の二首は自らが乗る「ふね」であり、それによって都や封国へ行くためのものである。王粲の詩は征討軍の「ふね」が川一面に浮かんでいる様子を詠う。いずれも『國語』の内容との関連性は乏しいように思われる。「汎舟」の先例として挙げているのであろう。

いずれにせよ、これら「輕舟」「方舟」「汎舟」は、前代にも見られた語であるが、この魏の頃からその数は増えており、六朝を通して詩語として定着していったと考えられる。

その他、魏の詩賦には以下のような「ふね」もある。

王粲「從軍詩五首」其五（『文選』卷二十七）

日夕涼風發

日夕 涼風發し

であり、それが無い、あるいはその「ふね」では行けないということ述べている。先の「贈王粲」にも「輕舟」の語で同様の例が見られ、曹植が意識してこういった表現を用いていることがうかがえる。これは、曹植にとって「ふね」が対象との距離を埋めるための手段であることを示しており、それが無い（あるいはその手段ではできない）ために、思いを果たすことができず愁いが増していくのである。

その他、この時代に複数の用例が見られるのは「汎舟」である。

曹植「贈白馬王彪」（『文選』卷二十四）

伊洛廣且深

伊洛 広く且つ深し

欲濟川無梁

濟らんと欲するも川に梁無し

汎舟越洪濤

舟を汎べて洪濤を越え

怨彼東路長

彼の東路の長きを怨む

〈李善注〉國語曰、秦汎舟于河。（國語に曰く、秦舟を河に汎ぶと。）

曹植「朔風詩」（『文選』卷二十九）

臨川暮思

川に臨みて暮に思ふも

何爲汎舟

何為れぞ舟を汎べん

……

……

誰忘汎舟

誰か舟を汎ぶを忘れんや

愧無榜人

榜人無きを愧つ

翩翩漂吾舟

翩翩として吾が舟を漂はす

魏文帝「浮淮賦」（『初學記』卷六）

浮飛舟之萬艘兮、建干將之鉞戈。揚雲旗之續紛兮、聆榜人之謹諱。

飛舟の万艘を浮べ、干將の鉞戈を建つ。雲旗の續紛たるを揚げ、榜人の謹諱たるを聆く。

「吾舟」「飛舟」など、それまでにない新たな「ふね」の語である。「輕舟」「方舟」等とも合わせ、この時期、「舟」字に材質を表す木名以外を冠するものが増えてくる。しかしこの「吾舟」「飛舟」の語は、以後に継承されていく様子は見られない。

さらに次のような例がある。

楊修「出征賦」（『太平御覽』卷七百七十）

汎順風而迴艫、徐日轉而月移。旆已入乎河口、殿尚集于菌池。

菌池。

汎びて風に順ひて艫を廻らし、徐に日転じて月移る。旆は已に河口に入り、殿は尚ほ菌池に集まる。

曹植「盤石篇」（『魏詩卷六』）

方舟尋高價

方舟 高価なるを尋ね

珍寶麗以通

珍寶 麗きて以て通ず

一舉必千里

一たび挙がれば必ず千里

楊修「出征賦」には「ふね」の向きを変えることを「艦を廻らす」といい、曹植「盤石篇」には帆を上げることを「帆幢を挙げ」というように、詩における「ふね」の表現も少しずつ新たなものが見られるようになる。

そしてこれら魏の詩賦の「ふね」はすべて詩人自身が乗るものである。詩人としては、王粲、曹植に目立つ。とりわけ王粲の詩賦は、都を逃れて荊州にいたときの様子を詠うもの、あるいは呉征伐に従軍したときの様子を描くものであり、南方の地での経験が踏まえられた作となっている。

一方で魏代には、漢賦に見られた天子・諸王の舟遊びを詠うものはほとんど見られない<sup>7)</sup>。やはりそういった遊覧は、太平の世であればこそ行われるものであったためではないだろうか。

#### 四 西晋

つづいて西晋である。まずこの時代の賦を代表するものとして、洛陽の紙価を高めた左思の「三都賦」を見てみたい。

先に述べておくと、「魏都賦」には「ふね」は描かれず、「蜀都賦」にはわずかであるのに対して、「呉都賦」には非常に多くの「ふね」に関する描写がある。当然、これはその地域性が大きく影響しているであろう。さらに

魏の詩賦にはほとんど見られなかった舟遊びもまた描かれるようになる。これは三国が統一され、太平の世になったことを象徴するものと言える。

#### 左思「蜀都賦」(『文選』卷五)

試水客、艤輕舟、娉江婁、與神遊。罨翡翠、釣鯁鮠、下高鵠、出潛虬。吹洞簫、發櫂謳。感鱒魚、動陽侯。水客を試み、輕舟を艤ふ。江婁を娉し、神と遊ぶ。翡翠を罨にし、鯁鮠を釣り、高鵠を下し、潜虬を出だす。洞簫を吹き、櫂謳を発し、鱒魚を感ぜしめ、陽侯を動かす。

「蜀都賦」には、狩猟に倦んだ豪族らが舟遊びをする様子が描かれる。彼らが乗るのは「輕舟」であり、「ふね」そのものの描写は簡潔である。そしてやはり最後に「櫂謳」がうたわれる。

#### 左思「呉都賦」(『文選』卷五)

於是樂只行而歡飫無匱、都輦殷而四奥來暨。水浮陸行、方舟結駟。唱櫂轉轂、味且永日。……輕輿按轡以經隧、樓船舉颶而過肆。……軍容蓄用、器械兼儲。吳鉤越棘、純鈞湛盧。戎車盈於石城、戈船掩乎江湖。

是に於て只の行を樂しみて欲飫匱しき無く、都輦殷んにして四奥より暨る。水に浮び陸に行き、舟を方べて駟を結ぶ。櫂を唱へ轂を転じ、味且より永日

まです。……輕輿轡を按じ以て隧を経、樓船颶を挙げて肆を過ぐ。……軍容蓄へ用ひ、器械兼ね儲ふ。吳鉤越棘あり、純鈞湛盧あり。戎車石城に盈ち、戈船江湖を掩ふ。

一方、「呉都賦」には多様な「ふね」の描写が見られる。まず都を出入りするのに車も「舟」も用いられること(水浮陸行、方舟結駟)、市場の店に「樓船」で来ること(樓船舉颶而過肆)などが詠われており、すなわち日々の生活の中に普通に「ふね」があることが分かる。さらには軍船を「戈船」と言い、それが江湖を覆うように集まっている様子(戈船掩乎江湖)も描かれる。

なお、これらに乗るのは作者とは無関係の人々であり、あるいは風景の一部としての「ふね」と見ることもできるかも知れない。

さらに左思は呉王の舟遊びのさまを次のように詠う。

汎舟航於彭蠡、渾萬艘而既同。弘舸連舳、巨艦接艦。飛雲蓋海、制非常模。豐華樓而島峙、時髣髴於方壺。比鷁首而有裕、邁餘皇於往初。張組幃、構流蘇。開軒幌、鏡水區。槁工楫師、選自閩禺。習御長風、狎翫靈胥。責千里於寸陰、聊先期而須臾。櫂謳唱、簫籟鳴。洪流響、渚禽驚。

舟航を彭蠡に汎べ、万艘を渾しくして既に同じ。弘舸舳を連ね、巨艦艦を接す。飛雲蓋海、制は常の模に非

ず。華樓を置ねて島のごとく峙ち、時に方壺に髣髴たり。鷁首を比べて裕かなる有り、余皇に往初に邁ぎたり。組幃を張り、流蘇を構ふ。軒幌を開き、水区に鏡る。槁工楫師、閩禺より選ばる。長風に習御し、靈胥に狎れ翫ぶ。千里を寸陰に責め、聊か期に先んじて須臾なり。櫂謳唱ひ、簫籟鳴る。洪流響きて、渚禽驚く。

ここに描かれる「ふね」の様子は前代までのものとは異なる点も多い。まず万艘もの「ふね」が一つになって進んでいく様子(汎舟航於彭蠡、渾萬艘而既同)などは、漢賦には見られない。さらに大型の「ふね」を「弘舸」「巨艦」と称し、それが連なる様子をへさきやともを表す「舳」「艦」の語を用いて「舳を連ね」「艦を接す」と表現するのも新しく特徴的である。この「舳艦」の語自体は『漢書』武帝紀に「舳艦千里、薄樅陽而出」(舳艦千里、樅陽に薄りて出づ)とあるのがおそらく初出と思われ、これを踏まえて「ふね」が連なることをいう「舳艦千里」の句は、魏文帝「浮淮賦序」(『初学記』卷六)や、陸機「弁亡論」下(『文選』卷五十三)等にも見られる。しかし散文が大半で詩賦にはほとんど見られず、また「舳」「艦」を同時に用いる際に、それらをあえて分けて使う例もこの呉都賦より前にはない。

さらに続けて「飛雲」「蓋海」(ともに呉の樓船の名)といった楼閣を重ねた島のように巨大な「ふね」が、鷁首を並べて進む様子(豐華樓而島峙、時髣髴於方壺。比



鶴首而有裕、邁餘皇於往初)、その「ふね」に美しい飾りが施されている様子(張組幃、構流蘇。開軒幌、鏡水區)などがことば巧みに描写される。

そして最後にはやはり「權謳」がうたわれる。これは漢賦と同じような展開であり、ある意味では常套表現ではあるが、それが遊覧の楽しさをより強調する効果もあるのである。

この「ふね」に乗る呉王は、左思が仕えた主君ではなく、必ずしも称える必要があるわけではない。その巨大さ、豪華さを述べることで自体が目的であり、大いなる呉都の様子の一端として詠っているのである。これもまた風景の中にある「ふね」と言えるかもしれない。

同じく西晋・傅玄の「正都賦」には次のようにある。

傅玄「正都賦」(『太平御覽』卷三百三十四)

飛雲鶴首、龍舟餘皇、縹纒水城、蜀艇吳航、萬艘俱興、雲帆齊張。懸旆光天、征鐸琳琅。凌波沂流、星列厲行。

飛雲鶴首、龍舟余皇、縹纒水城、蜀艇吳航、万艘俱に興り、雲帆 斉しく張る。懸旆 天に光やき、征鐸 琳琅 たり。波を凌ぎて流を沂り、星のごとく列なり鷹ごとく行く。

これには「飛雲」「鶴首」「龍舟」といった大型の「ふね」が、帆を挙げて並んで進む船団の様子が華やかに描かれており、左思「吳都賦」に通じるものがある。ただ

羽旗垂藻葩

羽旗 藻葩を垂る

閻丘沖「三月三日応詔詩二首」其二(晋詩卷八)

浩浩白水 浩浩たる白水

汎汎龍舟 汎汎たる龍舟

皇在靈沼 皇は靈沼に在り

百辟同遊 百辟 同遊す

このように西晋詩においては、天子の舟「龍舟」が目立つ。この語自体はすでに漢賦から用いられているが、魏代にはほとんど見られない。これは魏の詩賦に天子の舟遊びを詠うことが少ないことと関連しているよう。上記の作はすべて天子遊覧の様子を描いており、陸機を除いて上巳節に天子臨席の場で作られた公宴詩である。そもそもこのような太平の世における天子の遊覧を描くのは、すでに見てきたように古くは賦の役割であった。すなわち賦から詩へと文学の流れの特徴をこの辺りからも垣間見ることができる。

## 五 東晋

つづいて東晋である。都が江南に移ったことにもよるであろうが、詩賦における「ふね」の描写はさらに増えてくる。

しこの傅玄の作は晋の都洛陽を詠うものであり、当然そこには自らが仕える天子を称える意識もあろう。その点が左思の吳都賦とは異なっている。

この他、裴斐に「船賦」(『芸文類聚』卷七十一、『初学記』卷二十五)という作もあり、西晋賦においては「ふね」の描かれ方もさらなる広がりを見せている。

しかし一方で西晋詩には、それほど「ふね」を描くものもなく、また「汎舟」など前代に見られる表現と変わらないものも多い。その中で比較的多いのが次のような例である。

程咸「平吳後三月三日從華林園作詩」(晋詩卷一)

皇帝升龍舟 皇帝 龍舟に升り

待幄十二人 幄に待す 十二人

張華「太康六年三月三日後園會詩」(晋詩卷三)

合樂華池 華池に合樂し

祓濯清川 清川に祓濯す

汎彼龍舟 彼の龍舟を汎べ

沂游洪源 洪源に沂游す

陸機「權歌行」(晋詩卷五)

元吉降初已 元吉 初已に降り

濯穢遊黃河 穢を濯ぎ黃河に遊ぶ

龍舟浮鶴首 龍舟 鶴首を浮べ

若乃偏荒速告、王命急宣、飛駿鼓楫、汎海凌山。於是候勁風、揭桀百尺。維長綯、挂帆席。……決帆摧檣、戕風起惡。廓如靈變、惚恍幽暮。

乃ち偏荒 速かに告げ、王命 急に宣ぶるが若き、飛ぶこと駿やかに楫を鼓し、海に汎び山を凌ぐ。是に於て勁風を候ち、百尺を掲ぐ。長綯を維ぎ、帆席を挂く。……帆を決し 檣を摧き、戕風 悪を起こす。廓如として靈変し、惚恍として幽暮なり。

この木華の「海賦」は海に浮かぶ「ふね」を初めて描いたものである。さらに興味深いのは、帆をかけて出航する様子、さらに荒れる海によって帆が破れて帆柱がくだけるさまなども描かれている点である。海の荒々しさを描く目的もあるが、激しく揺れる波の中にある「ふね」の描写は新奇である。

郭璞「江賦」(『文選』卷十二)

若乃宇宙澄寂、八風不翔、舟子於是擿棹、涉人於是櫂榜。

漂飛雲、運餘鯉。舳艫相屬、萬里連檣。沂洄沿流、或漁

或商。……徐而不颺、疾而不猛。鼓帆迅越、超漲截洄。

凌波縱柂、電往杳溟。

乃ち宇宙澄寂にして、八風 翔けざるが若きは、舟子 是に於て棹を擿り、涉人 是に於て榜を櫂す。飛雲を漂はせ、餘鯉を運らす。舳艫 相ひ属なり、万里 檣を連ぬ。沂洄して流に沿ひ、或いは漁し或いは商す。……

木華「海賦」(『文選』卷十二)

：徐なれども颯からず、疾なれども猛しからず。帆を鼓して迅く越え、漲きを起え洞きを截る。波を凌ぎ柂を縦ち、電のごとく往きて杳溟たり。

郭璞「江賦」にもさまざまに「ふね」の描写がある。「飛雲」「餘艫」（いずれも船名）といった「ふね」が遠くまで連なるさま（漂飛雲、運餘艫。舳艫相屬、萬里連橋）を詠い、さらにそれが時にゆつくりと、あるいは速く、帆を挙げ、波を越えて遙か進んで行く具体的描写（徐而不颯、疾而不猛。鼓帆迅越、趙漲截洞。凌波縱柂、電往杳溟）などは非常に特徴的で、それまでにあまり見られないものである。

なおこれら「海賦」「江賦」に見られる「ふね」は、作者が乗るものでも、天子が乗るものでもない。「海賦」では「王命」を受けた者、「江賦」では「舟子」「涉人」が乗っているが、彼らが海や長江を越えて進んでいく様子を詠う。これもまたある意味では、海や長江といった風景のなかにある「ふね」と見ることもできる。またこの「江賦」にも「鼓帆」（帆を鼓す）という語が見られるように、東晋以降、詩賦に「帆」の描写が増えてくる。

湛方生「帆入南湖（帆して南湖に入る）詩」

（晋詩卷十五）

彭蠡紀三江

彭蠡三江を紀し

はり作者自身である。

最後に陶淵明の詩に描かれる「ふね」を見てみたい。

陶淵明「始作鎮軍參軍經曲阿作」（『文選』卷二十六）

投策命晨旅

策を投じて晨旅を命じ

暫與園田疎

暫く園田と疎なり

眇眇孤舟逝

眇眇として孤舟逝き

緜緜歸思紆

綿綿として帰思紆はれり

陶淵明「辛丑歲七月赴飯還江陵夜行塗口」

（『文選』卷二十六）

叩棹新秋月

棹を叩く新秋の月

臨流別友生

流に臨みて友生と別る

陶淵明「歸去來」（『文選』卷四十六）

或命巾車

或いは巾車に命じ

或棹孤舟

或いは孤舟に棹さす

陶淵明「於王撫軍座送客詩」（晋詩卷十六）

目送回舟遠

目に回舟の遠ざかるを送り

情隨萬化遺

情 万化に随ひて遺る

陶淵明「五月旦作和戴主簿詩」（晋詩卷十六）

虛舟縱逸棹

虚舟 逸棹に縱せ

回復遂無窮

回復 遂に窮まり無し

廬岳主衆阜  
白沙淨川路  
青松蔚巖首

廬岳 衆阜に主たり  
白沙 川路に淨く  
青松 巖首に蔚たり

湛方生「還都帆（都に還らんとして帆す）詩」

（晋詩卷十五）

高岳萬丈峻  
長湖千里清  
白沙窮年潔  
林松冬夏青

高岳 万丈にして峻く  
長湖 千里にして清し  
白沙 窮年潔く  
林松 冬夏青し

湛方生「天晴詩」（晋詩卷十五）

落帆修江渚

帆を落して江渚に修め

悠悠極長昞

悠悠として長昞を極む

清氣朗山壑

清氣 山壑に朗らかに

千里遙相見

千里 遙かに相ひ見る

これら湛方生の詩では、詩題に「帆」字が用いられており、おそらく「ふね」に乗ること（出帆すること）を言うのだろう。そこには「ふね」で旅をする中で見た景色などが描かれている。さらに「天晴詩」の「落帆」も新たな表現である。帆を挙げることには以前にもあるが、帆を収めることを詠うのはこれが初見である。数は少ないが、湛方生の詩にこういった語が散見されることは留意すべきであろう。なおこれらの「ふね」に乗るのはや

陶淵明「庚子歲五月中從都還阻風於規林詩二首」其一

（晋詩卷十六）

鼓棹路崎曲

棹を鼓すれば路は崎曲し

指景限西隅

景を指せば西隅に限らる

……

凱風負我心

凱風 我が心に負き

戢柁守窮湖

柁を戢めて窮湖を守る

高莽眇無界

高莽 眇として界無く

夏木獨森疎

夏木 独り森疎たり

誰言客舟遠

誰か言ふ 客舟遠しと

近瞻百里餘

近く瞻る 百里余

陶淵明「丙辰歲八月中於下潁田舍穫詩」（晋詩卷十七）

揚櫂越平湖

櫂を揚げ平湖を越え

汎隨清壑迴

汎びて清壑に随ひて迴る

陶淵明もしばしば「ふね」を描くが、その中で「孤舟」、「回舟」（かえる舟）、「客舟」（旅の舟）、「虚舟」など、それまでにない新たな語である。とりわけ一艘の舟を表す「孤舟」という語は、単なるモノである「舟」に「孤」字を冠することで、寄る辺ない孤独感を抱かせる絶妙な詩語となっている。さらに「客舟」の語もまた、これだけで旅愁を感じさせるものであると言えよう。すなわちこれら陶淵明の詩においては、「孤舟」「客舟」な

ど、「ふね」の語そのものが情を含むものとなっているのである。これはそれまでの「輕舟」や「方舟」といったものとは明らかに違う陶淵明独自の「ふね」である。

またそのほとんどが陶淵明自身が乗るものであるが、その中で唯一「回舟」に乗っているのは、去りゆく客(友人)である。詩賦において友人が乗る「ふね」を描くのは、確認できる限りにおいては、陶淵明のこの詩が最初である。

加えて「縦逸棹」「棹孤舟」「鼓棹」「戢柁」「叩棹」「揚楫」など、棹、櫂、楫によって「ふね」を動かす(あるいは止める)ことを詠うのも目立つ。先例があるものもあるが、「逸棹」「戢柁」などは以前には見られない表現でもある。そしてこれらは「孤舟に棹さす」「棹を鼓す」「楫を揚げ」など、陶淵明が自ら棹をあやつっているのとはあるまいが、あたかも自身が「ふね」をあやつるかのようには詠うのである。それまでは「ふね」をあやつるのは多くは詩人ではなく、「舟子」「榜人」といったいわゆる船頭であった。あるいは陶淵明は自ら「ふね」をあやつるように詠うことで、自身を隱者に擬しているのではないだろうか。「鼓棹」「叩棹」などの語は、あきらかに『楚辞』漁父の「漁父莞爾而笑、鼓枻而去」(漁父莞爾として笑ひ、枻を鼓して去る)を踏まえたものである。おそらく陶淵明は、『楚辞』の漁父の姿を自分自身に重ね合わせ詠っていたのではないだろうか。

簡潔なものであり、詳細な記述という点においては、やはり言葉を鋪陳する賦に軍配があがる。

東晋になると、木華「海賦」や郭璞「江賦」などに、激しい風や波に揺られ、あるいは波濤を越えて遠くゆくなど、それまでにない新たな「ふね」の描写が見られるようになる。

なおこれら賦に詠われる「ふね」の場合、漢代以降、多くは作者が乗るものではない。漢賦においては諸侯や天子が乗っており、それらを称えるという意識もあるうが、左思「吳都賦」や、木華「海賦」、郭璞「江賦」となると、作者とは無関係の人が乗る「ふね」であり、すでに述べたように風景の一部と見ることができるともいえない。しかしそもそも賦とは主題に関する語を敷き連ねて作られるものであり、必ずしも眼前にある風景を詠うわけではない。その意味においては創作であり、最初に挙げた何遜や梁簡文帝の詩に描かれるものとは明らかに異なっている。すなわち詩人が目にした山水風景の中にある「ふね」を描くのは、この東晋までにはまだ見られない。また稿を改めて論じるが、宋代においてもその傾向は変わらず、やはりそういった描写は齊梁代以降にならないうと見られないものと思われる。

一方で東晋の詩においては、湛方生、陶淵明などにそれまでにない「ふね」の語が見受けられる。湛方生の詩に帆を描くことが散見されるのは注目すべきだが、それらはあくまで帆を挙げる(おろす)という「ふね」にま

#### おわりに

以上、本稿では、先秦から魏晋時代までの詩賦に描かれる「ふね」について、その変遷を見てきた。

まず『詩経』に見られる「ふね」は、比喩的な意味で使われることが多いのに対し、『楚辞』では実際に人が乗ってゆくものとして描かれる。それは江南という地域性が大きく関わっているものと思われる。

漢代になると、とりわけ賦における諸侯や天子遊覧の場面で、非常に豪華な「ふね」の様子が描かれるようになる。このような天子の遊覧は天下太平の時代を象徴する意味もあろう。そのためか三国・魏代にはあまり見られない。

一方、魏の詩賦には曹植、王粲らが自ら乗るものとして「輕舟」「方舟」などの語が多用されている。特に曹植の詩には、これらの「ふね」を対象との距離を埋める手段として捉え、それが無いことが愁いに繋がるという展開が多く、一つの特徴であると言える。いずれにせよこれら「ふね」の語は後世にも多く継承され、やがて詩語として定着するようになっていく。

西晋代になると再び王や天子の遊覧を詠う作が見られるようになる。とりわけ左思「吳都賦」には、呉王の遊覧のために巨大な「ふね」が船団を組んで進むさまが詳細に描かれている。そしてその天子遊覧は詩にも詠われるようになる。それは賦から詩へと文学の流れにあつて当然の帰結と言えるが、詩における「ふね」の描写は

つわる表現としてであり、最初に挙げた何遜の詩のように、「帆」の語で「ふね」そのものを表すような例はまだ見られない。そして陶淵明は「孤舟」「客舟」など情を含む「ふね」の語を作り出し、さらに作者本人ではなく去りゆく友人が乗る「ふね」を詠うなど、先例のない「ふね」を詠っている。また淵明自身を『楚辞』に出てくる漁父に擬し、あたかも自らが櫂を操っているかのように詠うことも多い。これらは陶淵明詩の大きな特徴であると言える。なお詩語としては「孤舟」は後の詩にも見られるが、「客舟」「回舟」等は以降の六朝詩に継承される様子はない。

今後はどのような語が受け継がれ、どのような語が消えていくのかという点も含め、六朝における「ふね」の描かれ方の変遷と、山水風景の中にある「ふね」がいつ頃、どのように詠われるようになるのかについて、さらに考察を進めていきたい。

#### 注

〔1〕本稿に引用する資料は、『毛詩注疏』(十三經注疏)『楚辞補注』、胡刻本『文選』、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』、『芸文類聚』、『初学記』、『太平御覽』を底本とする。

〔2〕『春秋左氏伝』桓公十六年に以下の話がある。衛の宣公には急子(伋)と寿の二子があったが、寿の母宣姜は寿を後継にするため異母兄である急子を亡き者にしようとして画策し、急子を生母の故国齊に行かせてその途上で殺させようとした。

それを知った寿は、急子に酒を飲ませて酔いつぶし、自ら身代わりとなって斉に行き殺され、後を追った急子も殺されたという。詩序によると「二子乗舟」は、この兄弟を悼んで作ったものとする。

[3]その他『詩経』の「ふね」として「刀」がある。衛風・河広に「誰謂河廣、曾不容刀」（誰か河の広しと謂はんや、曾ち刀を容れず）とあり、鄭箋に「小船曰刀」（小船を刀と曰ふ）という。

[4]先にも触れた『爾雅』积水に、「天子造舟。諸侯維舟。大夫方舟。士特舟。庶人乘泝」（天子は造舟。諸侯は維舟。大夫は方舟。士は特舟。庶人は泝に乗る）とあり、「泝」は庶人の乗る「ふね」であるとする。その郭璞注に「併木以渡」（木を併せて以て渡る）とある。

[5]「龍舟」「鷁首」の典故について、『文選』李善注は多く『淮南子』本経訓に「龍舟鷁首、浮吹以娛」（龍舟鷁首、浮吹して以て娛しむ）とあるのを引く。

[6]「舟」と「船」について、現代では一般に動力のある大型のものを「船」、手こぎの小型のものを「舟」とするが、当時はどうだったのか。漢代の散文にはしばしば「船」字も見られるが、武帝「征南粵詔」（『史記』南越列伝）に「令罪人及江淮以南樓船十萬師往討之」（罪人及び江淮以南の樓船十萬の師をして往きて之を討たしむ）とあるように「樓船」の語が多い。また「大船」の語（淮南王劉安「上書諫伐南越」『漢書』嚴助伝）はあっても、「大舟」の例が見られないことを考えても、一つは大きさが基準となっていたと思われる。

陶淵明「五月且作和戴主簿詩」の「虚舟」について、松枝茂夫・和田武司訳注『陶淵明全集』（上）（岩波文庫 一九九〇）は、上述の『莊子』列禦寇を踏まえた表現であるとする。いずれの『莊子』を典故とするにせよ、陶淵明より前の詩賦においてこの語を用いる例は見られない。

[9]この陶淵明「始作鎮軍參軍經曲阿」の「孤舟」について、富永一登先生『『孤』を用いた文学言語の展開―陶淵明に至るまで―』（初出『未名』第二二号（神戸大学中文研究会二〇〇四）、後『文選』李善注の活用―文学言語の創作と継承』研文出版二〇一七）に収録）には、「一艘の舟に身を託し故郷をはるかに離れていく心情は憂愁そのものであったに違いない。それが凝縮されて『孤舟』という言葉になったのである」と指摘されている。

しかし一方で、揚雄『方言』卷九には「舟、自關而西謂之船、自關而東或謂之舟、或謂之航」（舟は、関自りして西は之を船と謂ひ、関自りして東は或いは之を舟と謂ひ、或いは之を航と謂ふ）といい、函谷関を堺として東と西で呼び名が変わるとする。なお後漢・王逸の『楚辞』注には「舟、船也」という訓がしばしば見られ、王逸はこれと同じものと見なしていたようである。

[7]韋誕に「景福殿賦」（『芸文類聚』卷六十二）に「然後御龍舟兮、翳翠蓋。吳姬擹歌、越女鼓柁」（然る後に龍舟を御し、翠蓋を翳す。吳姫擹歌し、越女柁を鼓す）とある。単に散逸して残っていない可能性もあるが、魏の詩賦で天子の舟遊びが詠われるのは、確認できるかぎりではこの一例のみである。

[8]「虚舟」の語は、『文選』には二例、謝靈運「遊赤石進帆海」（卷二十一）に「溟漲無端倪、虚舟有超越」（溟漲は端倪無く、虚舟は超越する有り）とあり、任昉「出郡伝舎哭范僕射」（卷二十三）に「兼復相嘲諷、常與虚舟值」（兼ねて復た相ひ嘲諷し、常に虚舟と値ふ）とある。李善注にはいずれも『莊子』山木の「有虚舟來觸舟」（虚舟の来りて舟に触る有り）を引く。なお現行『莊子』は「虚船」に作る。また川合康三・富永一登・釜谷武志・和田英信・浅見洋二・緑川英樹訳注『文選』詩篇（二）（岩波文庫二〇一八）では、謝靈運「遊赤石進帆海」の「虚舟」は、『莊子』列禦寇の「汎若不繫之舟、虚而遨遊者也」（汎として繋がざるの舟の若く、虚にして遨遊する者なり）とあるを踏まえるとする。本稿に挙げた